

島の魅力を守り伝える博物館

井月保仁

令和六年三月八日（金）、東京・永田町の全国町村会館にて「しまづくりフォーラム」が開催された。日本離島センターが主催する本フォーラムは、島の将来像や振興策について考える場として不定期で開催されており、今回は「博物館を活用した島づくり」がテーマ。離島の博物館がそこに住む人々や地域の発展に対して担う役割について、北海道利尻町、新潟県佐渡市、長崎県対馬市、沖縄県久米島町の四市町の博物館に勤める学芸員の方々による講演とパネルディスカッションが行なわれた。当日は、自治体関係者や離島を含む各地の博物館学芸員など、会場来場者とオンライン視聴者を合わせて約七〇人が参加した。

講演①

対馬博物館と島づくり
くモノ・ヒト・コトのつ
ながるところ

対馬博物館
尾上博一、谷尾崇

九州の北端、朝鮮半島に最も近い対馬島。対馬博物館は、かつて藩主・宗氏が居城としていた金石城跡に隣接し、建物は城の石垣を見上げた先に建っている。まさに島の歴史を今に伝える場所といえるだろう。平成一〇年に市が策定した「歴史民俗資料館基本構想」に基づき、同一五年には対馬藩主宗家文庫資料を一括購入するなど、博物館設立に向けた具体的な動きが進められ、令和四年にオープンした。

博物館は、対馬の歴史・自然・文化・芸術を総合的に扱う施設として設計され、島の総合的な理解促進や地域の魅力発信の役割などを担っている。館内には長崎県対馬歴史研究センターも併設されており、宗家関連資料の調査研究や保存修復が行なわれている。

また、博物館周辺には「旧金石城庭園」「対馬藩主宗家墓所」「清水山城跡」などの名勝・史跡があり、これらを活用した地域理解のガイダンス施設としての役割も果たしている。尾上氏は、「対馬博物館の使命は、対馬に関する資料の収集・保護・継承、そして対馬の理解を深めるための場の提供だ」と話す。

館内展示は、朝鮮半島や日本各地、

さらに東アジア諸地域との歴史的関連性に焦点を当てている。ワークショップや講演会、シンポジウムなどの教育普及活動も行なわれており、地元住民だけでなく観光客にも対馬の歴史を学ぶ機会を提供している。

特に注力しているのが「対馬博物館郷土愛醸成事業」で、市内の小中学生を対象とした体験型授業である。「対馬を離れても対馬に愛着を持ち、胸を張って誇れるようになってもらうための博物館の大切な事業だ」と、尾上氏は強調する。

もともと島外の昆虫研究者だった谷尾氏によると「生物地理学上、対馬という場所は日本列島の生物相を理解する上で不可欠だ」という。谷尾氏は絶滅危惧種ツシマウラボシシジミを守るためさまざまな研究に取り組んでおり、過去の分布を調べる中で島内の標本が役立った事例などを紹介した。また、島外研究者の視点から、博物館の担う

「島の内と外」をつなぐ役割、調査研究機関、域外保全協力施設、域内保全協力団体などとの関係構築の重要性について説明。令和五年に開催した対馬博物館特別展「対馬の昆虫」では、「研究成果や対馬の昆虫がどのような実態をもっているのか、島に還元することができた」と語った。

講演②

ちいさな館だからこそ博物館らしくネットワークとバトン

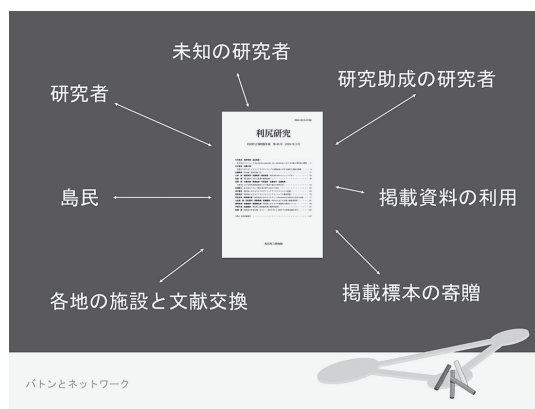
利尻町立博物館 佐藤 雅彦

利尻島は北海道の北端に位置し、主な産業は漁業と観光である。利尻山やリシリコンブが島のシンボルだ。佐藤氏は、利尻町立博物館の果たす役割を「根…資料の収集保管」「茎…調査研究」「花…共有化」の三つに分けて解説する。「根に栄養となる資料を与え続けられ、調査研究という茎が伸び、いつ

かは島内外に知られる花が咲く」と、博物館としての取り組みイメージを示し、「この土地に根ざしたもののから花を咲かせたい」と力を込めた。

佐藤氏によると、島の自然・歴史・民俗・芸能・文化などの「分野」とそれを内包する「場所」という二次元的な広がり、「時間」という三つ目の軸を加えることで、時空を超え、未来に島の姿を残すことができ、それこそが博物館の使命だという。しかし、小さい博物館では、あらゆる分野のものを残すのは困難であり、そこで外部とのネットワーク構築が重要になると指摘した。

昭和五七年創刊の『利尻研究』という研究紀要の紹介では、博物館の資料や記録、標本を「バトン」に例え、その重要性を説明。具体的な事例として、明治四四年に利尻島で生まれ、中学校の教師を勤めたが、島の植物の面白さに開眼し、長年にわたって調査や撮影、



『利尻研究』を中心とするネットワーク構築(利尻町立博物館)。

標本の収集を進めた松野力蔵氏とのやりとりを挙げた。佐藤氏は、松野氏との交流を通して「島の資料が島外に持ち出され、地元で見ることができない」ことに疑問を感じ、この流れから博物館では「地元で資料(バトン)を残す」活動に力を入れ、『利尻研究』の刊行につながったという。百ページにおよ

ぶ報告を掲載し、年一回刊行している研究紀要は、島内外の研究者や一般読者との橋渡しの役割を目指しており、実際に島と周辺地域に関するものを中心に、他地域の情報も含めた広範なネットワーク構築に貢献している。

もうひとつの活動として挙げられたのが「利尻島調査研究事業」である。島での研究を希望する者に対して研究助成金を支給する仕組みで、島の状況の理解促進に資する情報提供や調査協力も行なっている。

「これらの活動により島を愛する研究者が集まり、多様な成果が発表され、学芸員も幅広い知見を得る機会となった。最初はネットワークを行き来するバトンは少なかったかもしれないが、さまざまな活動を続けるうちに、多様なバトンが往来し始めている。今後ともバトンづくりを続けていきたい」と、佐藤氏は言葉に力を込めた。

講演③ 地域と博物館

佐渡博物館／佐渡学センター

本間 裕徳
ゆうとく

佐渡島は、面積約八五〇平方キロメートルと、東京二三区の約一・五倍の広さを持つわが国最大の離島である。主な産業は、稲作を中心とする農業と全国的に有名なイカやブリなどの漁業である。観光業も盛んで、トキ、金銀山、佐渡おけさ、鬼太鼓、能など有形・無形の観光資源を有する。公家・武家・商人の三つの文化があるとされ、三人の人間国宝や多くの著名人を輩出していることから、その文化の重層ささうかがい知ることができる。

佐渡にはそんな文化や歴史を今に伝える博物館や資料館が一〇館、体験・ガイダンス施設が二館ある。いずれも昭和三十〜五十年代に建てられたもので、この時期は佐渡への観光客が増加した時期と重なる。今回は、そのなか

ら「佐渡博物館」「佐渡国小木民俗博物館」「佐渡植物園」の役割や取り組みについて紹介があった。

佐渡博物館は「佐渡学センター」も兼ねた施設で、佐渡の自然・歴史・文化を総合的に解説。佐渡の成り立ちを物語る岩石、考古関連、動植物の剥製などを常設展示している。また、佐渡出身の日本画家・土田麦僊ばくせんの作品（下絵）も公開しており、佐渡の文化を知る入口として機能している。

佐渡国小木民俗博物館は、旧宿根本しゆくねもと小学校を利用しており、かつての生活道具や陶器、漁撈用具、船大工道具などを展示。佐渡植物園は、島に自生する植物を中心とした展示となっており、開園にあたっては植物学者の牧野富太郎氏の指導も受けているという。

多彩な博物館・資料館が点在する佐渡にあって、これら施設の活用や地域への還元を実現していくためには、地元の来館を増やすことが必要である。

実際、来館者の約六割が島外からの観光客で、「地元住民の博物館離れが著しい」と本間氏は話す。

その対策の一つとして佐渡博物館では、「行く」と「来てもらう」の二つの活動を行なっている。「行く」活動では、地元の人々に対する島内の文化財巡りや、小中学校・高校への出前授業を実施。「来てもらう」活動では、

博物館の調査成果の発表の場として特別展や企画展を開催している。「博物館の企画展は堅苦しくなりがちなので、それを解消して地域へ還元していくための施策が重要だ」と、本間氏は語る。若い世代に興味を持ってもらうための第一歩として、親子が楽しめるイベントの開催や、佐渡出身の人気漫画原作者・赤坂アカ氏によるキャラクター制作などを通じて「まず博物館を知ってもらう」ための活動を進めている。

博物館を運営する上で、少子・過疎・高齢化などによるマンパワー不足に加

え、学芸員育成などの面でも課題は多い。本間氏は「佐渡の文化を後世に残すことは必要不可欠。まずはそれに触れる情報や機会を多く提供することが重要。課題解決と博物館の役割を果たしていくために、情報発信元となる学芸員の成長が必要」と、講演を締めくくった。

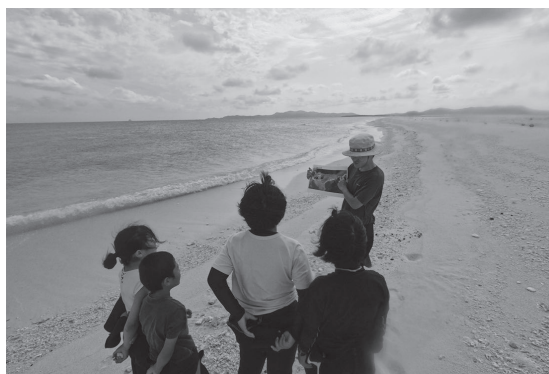
講演④

海に沈んだ歴史を活かした取り組みについて

久米島博物館

砂川 暁光 あきひろ

久米島は、沖縄本島の西方約一〇〇キロメートルの位置にある東シナ海上の島だ。東側からみた島影は左右に山があり、中央が凹んでいるため、ひょうたんを縦に割って、伏せた様子に例えられよう。「スライドに示した島影は、水中遺跡を調査する際に必ず目にする景色で、琉球王国の人々も眺めたもの」と砂川氏は説明する。美しい光



久米島ウランダ浜で行なわれた水中遺跡の現地見学会の様様。

景ではあるが、歴史的には幾人もの船乗りがこの島影を見ながら、海難事故に遭遇した危険な水域でもあるという。久米島博物館では、久米島の自然・歴史・民俗・美術工芸を収集・展示し、その普及や継承に努めている。歴史・考古の常設展示は、旧石器時代に始まり、縄文・平安時代並行期やグスク時代の展示資料が多く、近世から近代の

資料は少ないという。

博物館の役割として、遺跡の踏査や調査などを通じた「資料収集」、常設展示の更新や展示解説による「展示」、水中遺跡の調査・研究を行なう「研究」、水中遺跡の普及を行なう「教育・普及」、の四つの分野が挙げられた。

一六〇九年の薩摩藩による侵攻をもつて近世琉球王国時代に移行する。久米島は沖縄本島と中国大陸の福州を結ぶ重要な航路上の地点として位置づけられていた。それらは絵図や近世文書などの歴史的な知見に因るもので、砂川氏は「沿岸・水中遺跡の調査によって考古学的に実像に迫ることができると説明する。

特に、一八四九年に座礁したイギリス船「Elizabeth and Henry 号」は、本国から植民地への囚人輸送に従事しており、その背景には産業革命やアメリカ独立戦争が関連していると考えられる。「世界史の余波が、近世琉球に

到達したことを示す遺跡だ」と、砂川氏は述べた。

この遺跡を次世代に伝え、遺跡を通じて久米島の歴史、世界の広さを知ってもらうための教育・普及活動を実施している。島内の子どもたちを対象に、平成二三年に行なわれた現地見学会は非常に好評で、復活を希望する声も多い。今後は見学会を定期的に実施できる仕組みを整えたいうえで、遺跡を荒らすことなく見学し、遺跡の概要を分かりやすく伝えるための資料も整える必要があるという。「離島・久米島の隠れた魅力を見出して教育・普及に寄与することの重要性を感じている」と、砂川氏は力強く語った。

総合討論

〈博物館を活用した島づくり〉

各博物館の講演後、全講演者の参加による「博物館を活用した島づくり」

をテーマとした総合討論が、千葉県立中央博物館分館 海の博物館研究員の平田和彦氏をファシリテーターに加えて行なわれた。

平田氏の「博物館があつてよかったことは？」という質問に対し、久米島博物館の砂川氏は「戦後の本土復帰する前後に多くの資料が散逸してしまつたが、収集できたものは長い間役場の保管庫に収蔵されていた。博物館という良い環境下で保管できるようになつたのは良かった」と回答した。

平田氏によると、博物館の重要な役割として「資料収集・保存」「調査・研究」「教育・普及」「展示」を挙げられるという。「資料が良い状態で保管・収蔵されるのが最善だが、手入れやメンテナンスが必要であり、収蔵庫のスペースが減少している問題もある」と課題を挙げた。

収蔵スペースの確保については、外部との連携拡大を提案しつつも、地元

から資料が流出してしまう可能性がある」と指摘。その対策として、資料によつては「地元で保管するもの」と「他所で保管するもの」に分けることもありではないかと提案した。これを受けて、利尻町立博物館の佐藤氏は「地元でしか気付けない貴重な資料は優先的に島で保管する。他地域と資料が重複して



総合討論の様様。登壇者左から平田和彦氏、本間裕徳氏、砂川曉洸氏（オンライン）、佐藤雅彦氏（同）、尾上博一氏、谷尾 崇氏。島の博物館の今後について活発な議論が交わされた。

いる場合も、災害などのリスクを考慮して、あえて両地域で保管することもあり得る」と、考えを述べた。

対馬博物館の谷尾氏からは「土器表面の文様や成形時に付けられた農作物や昆虫の痕から、その時代の生物について分かることが多々ある」と、分野横断的な調査研究における博物館の重要性についての意見が挙がった。同博物館の尾上氏も「一つの館の中に他分野の研究者がおり、自分の専門分野を補完してくれるので、一步踏み込んだ調査研究ができることが大きなメリットだ」と、付け加えた。

平田氏は「このフォーラムをきっかけに、多くの人が島に足を運び、博物館を通じて島全体を楽しみ、未来について考えていくことを望んでいる」と、締めくくった。（島旅フォトライター）

QRコードから、本フォーラムの模様をご覧ください。

